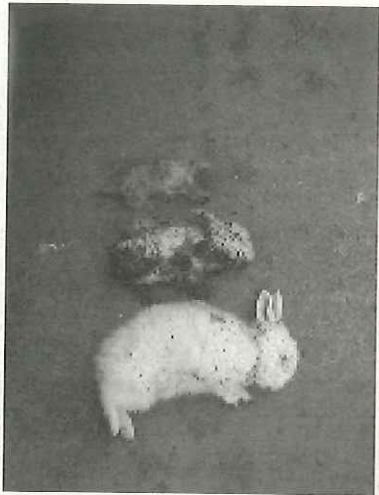


件が整わず、死が身近に起きても、子どもの心に波紋を起ささない。一時の波立ちはあっても、それはすぐに消えてしまう。子どもは一瞬のショックを経て、すぐに忘れることだろう。大事に育て、世話をし、可愛がる中で、その生き物が衰えを示し、それでも精一杯看護をして、そのあげくに死を迎える。そういった経過の中で、生き物の死は命が途絶えることとして子どもの心に刻まれることだろう。死はやむを得ないとしても、その前の生きることそのものを大事にしたいと思わせる。生まれ、育ち、衰え、死ぬことが生物の必然であることを納得し、死ぬことを含めて、命であると分かってくる。それは必ずしも理屈ではなく、生と死への出会いから生まれる実感なのである。

4 学校関係者の誤解を解く

学校関係者の中に動物の飼育に対する基本的な誤解があり、それが学校における動物飼育を拒否したり、また適切でない飼育方に導いているのではないだろうか。その啓発こそが本論文の目的でもある。学校での動物飼育のあり方は、学校という教育の目的の場にふさわしく、子ども集団と少数の教師という組み合わせの中で可能なものとして、かつ動物の愛護の精神と両立可能でなければならぬ。動物の飼育の教育的目的は、動物の体や習性を知るといふ生物教育の意味もあり、生態的環境に気づくといふ環境教育のねらいを持ち、さらに命を大事にするといふ大きなねらいにもつながるものである。

飼育方を子どもの発見に委ねるのがよいのではない。飼育方まで発見しては残酷な仕打ちを教えることになる。また、適切な飼育方の指導の上に子どもによる豊かな発見が十分に成り立つときに、子どもの側の主体性を大事にするという理念の元で極端なやり方が学校現場で見られることがある。実際、ザリガニを釣って、教室で飼おうというときに、飼育方を自主的に発見することから始めようとして、何匹となく死なせてしまったという例もある。子どもが発見し、工夫することを促すことは教育の基本であるが、同時に、動物を大事にし愛護するという姿勢も指導していくべきである。最小限、動物を死なせず、苦しめる



ことのない飼育方は初めから教師が理解して、子どもに教えてよいのである。その上で、動物の生態や行動についていくらでも面白い発見は可能である。

自然・野生に近づければよいのではない。自然・野生への幻想を捨てる。野生の動物の生態への誤解がある。その上、そのまま、がよいのではない。飼育の際の清潔さとか餌のやり方は固定的な野生の動物のステレオタイプのイメージでとらえず、ペットとして考える方がよい。

例えば、ウサギを飼うときに、野生では土の上で暮らすし、そこに穴を掘る。だから、飼育小屋の床を土として、そこに穴を掘らせようとしたりする。だが、そうすると、ウサギが穴に潜ってしまっていて、見ることができないので、肝心な子どもの興味を沸かせることができない。そして穴の中の様子が見えないので、そこでウサギの子どもが死んでいても分からない。土には尿がしみ込みカビが発生する。糞や毛や食べ残しなどの掃除も土を篩いにかけてなければ、汚れが蓄積する。つがいであるのが自然だし、子どもが生まれることが大事だと考えていると、次々にウサギが増え、飼いきれなくなる。ここで、一つには野生の状態への誤解がある。野生の場ならもっと広いから狭いところで混み合ったりしない。糞と餌が混じったりもしないでウサギの方が場を分ける。餌もふんだんにあるわけではないし、敵もいるから、いくらでも増えていくということはない。

既に学校で飼うというところで、狭い飼育小屋という条件なのである。その範囲で可能なことをするのだし、そこで生きていける動物を選んで飼育しているのである。野生の淘汰に任せることも出来ない。飼育するという責任が飼う人間の側に出来てしまっている。

動物に接すると自ずと命の教育になるのではない。継続的個別的で愛情のある世話を通して、愛着を抱き、動物の特徴や生態を理解していくことを通して可能になる。既に論じたように、その経過を通して子どもは命のあり方に目覚めていく。学校のどこかで飼っているから命の教育になると





いうことはない。日頃からの接触が必要である。毎日のように子どもが目にするはずのところに置いておけば、自ずと命の教育が達成されるとも言えない。見れども見えずということはいくらでもある。具体的に世話や遊びを通して関わり、個体の認識を含め、個別的愛着のある関係を取り結ぶなどのところから、常日頃から子どもの心のどこかにその動物が居着くようになるのである。

5 保護者や地域の専門家の支援を得る

教師だけや子どもだけの活動にすることが大事なのではない。無知なままで自力で行うことには価値はない。教師が勝手に飼育をしてしまうことになってはもちろん教育としての価値は乏しい。教師が世話をして、ときどき子どもが眺めたり、遊んだりする程度では子どもの心に食い込むような飼育活動にならない。といって、子どもの自主活動にすべて任せていては、動物にとって無惨な結果にもなりうる。教師と子どもの両方共が無知のまま話し合っても、必ずしも動物の飼育が価値あるものにならない。かえって、子どもの無力感と嫌悪感を増してしまい、また教師の負担感のみをいたずらに高めるだろう。

だから、教師は専門的知識を得て、さらに不足する点は学校外の保護者や専門家の援助を得て、連携を進めるのである。それでも苦労はあるが、意義ある活動となるだろう。専門的知識面でもそれは必要なことだし、土日や長期休業中の世話でも連携は不可欠である。とりわけ大事なのが地域にいる獣医師の協力である。学校獣医師制度を国の側で導入することが望まれるが、その前の段階としては、教育委員会と地域の獣医師会が提携する。また個別の学校が懇意の獣医師にお願いする。

獣医師側もその本来の仕事に動物飼育の適切なあり方への啓発を含めていくべきであろう。動物が身近にいて、動物を大事にする社会に将来していくためにも学校での飼育活動の適正化は何より重要だと認識してほしいのである。

(白梅学園短期大学学長

／お茶の水女子大学客員教授)

